

〔論文〕

カザフ人の移牧にともなう伝統技術

——ラクダによる運搬と移動式住居の組み立て方——

今 村 薫

名古屋学院大学現代社会学部

要 旨

モンゴル国西部のアルタイ山中で牧畜をおこなうカザフ人は、季節に合わせて年に3～4回、家畜群を連れて移牧する。カザフ人は、季節ごとの植生や気温が標高によって異なることを利用し、垂直移動を行う。移牧の際に家屋（天幕）や家具、衣服、日用品、食料を運ぶが、近年トラックを使う人が増えている中で、フタコブラクダを使って膨大な荷物を運ぶ家族も少数ながら残っている。ラクダに荷物を運ばせて春営地から夏営地へ移動する様子を観察した事例から、ラクダへの荷物の積み方、移動の方法、移動式住居の組み立て方について記述し、移牧という牧畜技術について考察した。

キーワード：カザフ人、移牧、フタコブラクダ、運搬、移動式住居

Transhumans among Kazakh people in Mongolia

——Load carriage technique on camel and how to build their tent——

Kaoru IMAMURA

Faculty of Contemporary Social Studies
Nagoya Gakuin University

* 本稿は、2017年度名古屋学院大学研究助成、およびJSPS科研費JP（18H03608、代表：今村薫）の助成を受けた研究成果の一部である。

発行日 2019年1月31日

1. はじめに

カザフ人は中央アジアに住む牧畜民である。現在、カザフ人はカザフスタン共和国を中心に中央アジア諸国に居住しているが、本研究で対象とするモンゴル国のカザフ人はモンゴル国西端のアルタイ山中で暮らしている。彼らは18世紀にカザフ草原で起こった政治的抗争が原因で離散し、カザフ側から東へ天山山脈を越えて中国側（新疆自治区）へ移住した。その後、中華民国成立時の混乱にとともに、さらにアルタイ山脈を北上して現在のモンゴル国で暮らすようになった。現在のこの地域のカザフ人は、モンゴル国の少数民族として牧畜を中心に生活している。

牧畜民は、農業と牧畜の両方を行う農牧民と、牧畜だけを行う専門牧畜民に大別できるが、この専門牧畜の形態には、遊牧、移牧、定牧の3種がある（稲村，2014）。牧畜社会の特徴は、人間が家畜群とともに移動する技術をもった社会であること（谷，2010）であり、牧畜とは人間と家畜群が共生したときにはじめて可能となる生活様式である。遊牧、移牧、定牧のいずれの形態であっても、これは、家畜を生存させることを第一の目的としており、人間の快適さを追求した結果ではない。

定牧は、一か所に定住して家畜を牧草地まで往復させる、あるいは、住居から離れた場所の放牧地で家畜を飼う形態である。家畜中心の農場を経営する場合もこれに含まれる。いずれにしても、人間の住まいは移動させない。

遊牧は、家畜とともに人間が住居を移動させる形態である。移動は、季節変化だけでなく、家畜が牧草を食い尽くした、あるいは、家畜に飲ませる水が枯渇したなどの様々な理由で不定期に移動する。次に述べる移牧と異なり、標高がそれほど変わらない地域を水平移動する場合が多い。

一方、移牧は季節に合わせて定期的に、標高の異なる場所を移動する形態である。夏に草がたくさん生えた高地に移動して家畜に牧草を十分に食べさせるだけでなく、低地での不快な高温や害虫から家畜を守る機能も併せ持つ。冬は標高の低いところに冬営地を構え、家畜を寒さから守る。家畜の餌として、夏から秋の間に集めた牧草を乾燥させた干し草を与える場合が多い。

カザフ人の伝統的な家畜構成は、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダ、ロバなどだが、降雨量が極端に少ない乾燥地ではウシやウマを飼うことができない。

カザフスタンの牧畜は、ソ連時代の共同農場を経て定牧がほとんどだが、移動する場合は、水平移動の遊牧を行う。

モンゴル国に目を移すと、多数派のモンゴル人については、水平移動である遊牧が多く報告されている（小長谷，1996など）。しかし、モンゴル国の西端、アルタイ山脈北麓に住むカザフ人は垂直移動による移牧を行う（西村，2011）。これは、モンゴル国のカザフ人が標高1000メートルを超える高地の、夏と冬の気温差の大きい地域に住んでいるせいだけでなく、彼らがモンゴル人と比べて少ない土地に密集して住んでいることによるものでもある（西村，2011）。

モンゴル国のカザフ人は、春夏秋冬に合わせて、家畜の牧草地と人間の住居を移動させる（表1）が、年に4回移動するとは限らず、夏秋冬の3回だけ、あるいは春夏冬の3回だけ移動させる人も多い。いずれにしても、家畜に牧草を食べさせて太らせる夏営地と、零下20度を下回る厳しい冬を家畜とともに超える冬営地は、どのカザフ人も確保している。

表1 営地の名称と滞在時期

季節ごとの営地	カザフ語	滞在期間
春営地	коктем	3月～ 6月
夏営地	жайлау	6月～ 9月
秋営地	күзеу	9月～11月
冬営地	қыстау	11月～ 3月

カザフ人が移牧のために移動するときは、家畜を移動させるだけでなく、人間の住居（移動式住居、すなわち天幕）と寝具や衣類、食料、食器などの家財道具一式も運搬する。そして、移動後に数時間のうちに天幕を建てて日常生活を再開させる。

これらの家屋と家財道具は合わせて1トンを超える。これらの荷物は、最近のカザフ人はトラックで運ぶ場合がほとんどだが、2017年2018年の時点で、3家族（拡大家族）だけが、夏営地までの運搬をフタコブラクダに積んで行っていた。これらの3家族は、川沿いの細くて急峻な道を通らなくては到達できない場所に夏営地を設けており、自動車（四輪車）での移動は不可能なのである。

ユーラシア大陸とアフリカ大陸では、かつてはラクダによる運搬が交易において重要な役割を果たしてきたが、近年のモータリゼーションにともない、ラクダを運搬に使う機会はめっきり減った。著者は、冬季のカザフスタンにおいて、ラクダがソリを引いて人間や荷物を運ぶのを観察したことがあるが、ラクダが大量の荷を積んで長距離を移動する場面を見たことがなかった。

今回、モンゴル国でラクダに家財道具を積んで移動する様子を観察することは、消えつつある技術の貴重な記録になり、ラクダ運搬による交易が盛んなころの考証と復元に役立つ。

本稿では、第一に、移牧において、どれくらいの標高の土地に営地（牧草地と居住地の複合）を設営するのかを明らかにする。第二に、ラクダに荷物を積載する順番や技法を記載する。そして、第三に、夏営地に到着後、どのようにして天幕を建てるのか、その組み立て方について詳述する。

これら三つの総体が、カザフ人の移牧の実態と移牧にともなう技術を解明することに寄与すると考える。

2. 調査地の概要と調査方法

調査は、モンゴル国西部バヤン・ウルギー県で行った（図1）。調査期間は、2017年8月5日から8月25日までと、2018年6月9日から6月25日までである。2017年は、バヤン・ウルギー県の中のウルギー市、アルタイ郡、サグサイ郡、ボルガン郡で家畜の飼育頭数や分布状況を調査した。2018年は、ボルガン郡を中心に移牧の実態の調査を行った。このときのボルガン郡における移牧に関する聞き取りと参与観察は、4軒の家を対象に行った。

その4軒のうち、春営地から夏営地までの移動をラクダで運搬を行っていたのはN氏だけであったので、ここでは、とくにN氏の例を記載する。N氏（55歳）の家族構成（同居）はN氏夫婦、長男夫婦と彼らの赤ん坊（1歳の男子）、7人の未婚の子どもたち（2男5女）の合計12人だった。他に、



図1 調査地

結婚して別の町に暮らす長女がいるということだった。2018年6月13日に、まず長男夫婦(+赤ん坊)とN氏の娘3人が夏営地に移動し、この移動に立ち会うことができた。N氏自身の天幕と家財道具の移動は後日行うということだったが、著者の限られた時間内に観察することはできなかった。

また、N氏の春営地、夏営地、秋営地、冬営地の場所を訪れて確認し、GPSデータを記録した。N氏以外の3軒が使う営地についても、それぞれGPSデータを記録した。

3. 移牧の実態

3.1. 営地の場所

N氏の春営地、夏営地、秋営地、冬営地のGPSデータを地図上に表示した(図2)。また、これらの営地の標高差と距離を図3に概念化した。N氏がラクダを使って移動した春営地から夏営地までは8キロほど離れており、標高差は433メートルであった。

N氏は、春夏秋冬、4か所に住居と牧草地を含む営地を持っているが、秋営地を使うのは、寒さが早くやってくる年に限られており、例年は使わないことが多いという。

N氏は、冬営地と春営地には、木造の頑丈な固定住居を建てている。この家はスタック・ウイ(БҮСҮҮК ҮЙ)といい、「暖かい家」を意味する。廣田(2016)によると、「カザフ人は元来固定住居を有してはいなかった。しかし、彼らはモンゴル人民共和国の社会主義期後期、1980年代頃からスタック・ウイに住むようになった。」

N氏の冬営地は標高が低く、風の通り抜けが少ない比較的暖かい土地に設営されている。この土地で冬だけでなく一年を過ごす人々もおり、ここは現在、小中学校が設置された定住村になっている。

N氏は自動車を保有しており、冬営地から春営地の移動は車で行う。ベッドなどの家財道具と食料は車で運ぶ。また、ヤギとヒツジを合わせて200頭ほど飼っており、とくにヤギは品種がカシミア・ヤギであり、その毛がN氏の主な収入源である。ヤギとヒツジからは乳を絞り、乾燥チーズを売る場



図2 N氏の季節ごとの营地

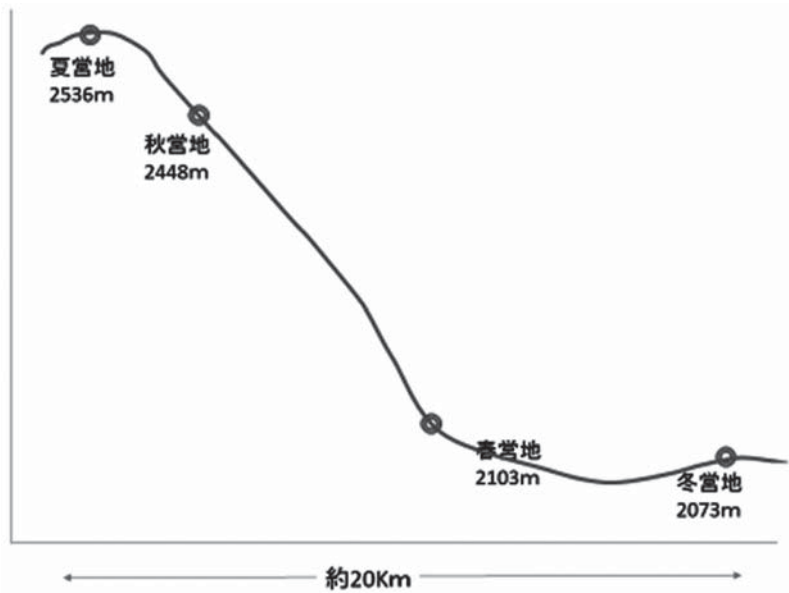


図3 N氏の各营地の標高差の概念図

合もある。さらに、ヤクを8頭（母獣4頭と仔獣4頭）飼っており、ヤクの乳からバターや酸乳を作る。これらは主に自家消費される。

夏営地と秋営地には、移動式住居を立てる。この家は、組み立て・解体可能な住居であり、キーズ・ウイ（кииз үй）と呼ばれる。キーズ・ウイとは、カザフ語で「フェルトの家」を意味する。これは、一般的にユルタと称される遊牧民の住居の一種であり、モンゴル人の移動式住居ゲルと似ている。

現在、モンゴルのカザフ人のほとんどは、車で春営地から夏営地まで移動している。トラックを借りて移動式住居（天幕）と家財道具一式を車に積んで運ぶ。家畜は歩いて移動させる。

しかし、N氏の夏営地は自動車を通れない場所にあるので、現在も春営地から夏営地までラクダで住居と家財道具を運び、現場ですばやく家を組み立てている。春営地と夏営地間の人間の移動は、徒歩（約2時間）、乗馬、バイクで行っている。

3.2. 移動と移動前後の時間配分

N氏は6月13日に、先発隊（長男夫婦と娘3人）を、春営地から夏営地に移動させた。また、翌日の14日に家畜群（ヤギとヒツジ）を移動させた。6月13日に移動と住居設営にかけた時間の配分は以下のとおりであった。

- 6:38 ラクダ5頭に荷物を積み始める。
- 8:10 ラクダ5頭とウマ3頭で春営地を出発する。
- 10:37 夏営地に到着する。すぐに荷物を降ろし、住居（天幕）を組み立て始める。
- 11:25~12:04 紅茶と揚げパンを食べて休憩。
- 12:04 住居を立てることを再開。
- 15:55 住居が完成。
- 17:00 壁掛けを釣り、家財道具を家の中に入れて、皆でお茶の時間にする。

この日は、春営地から夏営地までの約8キロの距離を、荷物を積んだラクダを引いておよそ2時間半かけて移動した。夏営地に到着後、すぐに天幕を組み立てる作業に取り掛かり、休憩を除いて3時間弱で家を完成させた。

家が完成してから、N氏は、長男夫婦と娘3人を夏営地に残し、自分はラクダ5頭を連れて春営地に帰って行った。翌朝、再び、N氏はラクダ5頭に荷物を積み、ヤギとヒツジ（合わせて約200頭）とヤク8頭を移動させた。14日に5頭のラクダに積んだ物はN氏自身の天幕とタンス2つだけだった。

3.3. ラクダへの荷積み方法

家畜ラクダには、フタコブラクダとヒトコブラクダの2種があるが、モンゴルではフタコブラクダだけを飼っている。カザフスタンでは、これら2種とさらに2種を交配させた雑種が飼育されている（今村，2016）。

ヒトコブラクダもフタコブラクダも、おもにオスが荷物運搬用の駄獣として使われ、これらのメス

からは乳を搾って利用されてきた。ヒトコブラクダとフタコブラクダを比較すると、一般的に、駄獣としてはフタコブラクダの方が力がありすぐれている。乳については、ヒトコブラクダのほうが泌乳量が多く、フタコブラクダの1.5倍～2倍の搾乳が可能であるという。ただし、フタコブラクダの乳はヒトコブラクダの乳より脂肪分が多い。

モンゴルは、カザフスタンより寒さが厳しいので、フタコブラクダしか飼育されていない。N氏は、オスのフタコブラクダを5頭飼っており、これらに、住居と家財道具、衣類、食料を積んだ。(メスのラクダは飼っていない。) 荷物の積み方は以下のとおりであった。

- (1) 天幕の壁と屋根に使うフェルトをラクダのコブに巻く。
- (2) 天幕の屋根棒などの長いものを、ラクダに左右均等に載せる。この状態をқомдауという。
- (3) 左右均等に荷物を載せる。この状態をтендеуという。
- (4) 荷物を紐で横と縦に縛る。この状態をтаргыуという。
- (5) この上に、食料、家具、食器などを載せ、絨毯で覆う。
- (6) さらに、扉、天窓、ゆりかごなどを載せる。

ラクダをまず座らせてから、上記の順番でラクダに荷物を積んでいく。(1) から(4) まで、ラクダのコブの間と前のコブの前方、後ろのコブの後方の計3ヶ所に加重を分散させながらロープを回して荷物を固定させるが、数人の人間がラクダの両側から体重をかけて、かなりきつく締め付けるのでラクダが悲鳴を上げることがある。扉などをのせて「完成」した例が図4である。



図4 ラクダに荷物を積んでいるところ

図4のラクダは、次の3.4.で説明する「ラクダ1」である。フェルトをラクダのコブに巻いてから、左右に格子状の壁をたたんだ形で載せ、その上に壁用フェルト（ラクダの左側）とミシン（ラクダの右側）を載せてバランスをとる。これらの荷物の上に布やフェルトを詰め、さらに煙突を載せた。最後に、家の扉を載せ、床敷カーペット（サルマック сырмақ）をかけて4人がかりでロープできつく縛り荷物を固定した。

この後、人が口笛で合図をするとラクダはさっと立ち上がり、高地にある夏営地に向かって移動を始めた。

3.4. それぞれのラクダの積載量

N氏が飼っているラクダは、すべてオスである。彼らはラクダに固有の名前を付けておらず、「種オス（ブラ бура）」「去勢オス（アタン атан）」というカテゴリ名で読んでいる。そこで、ここではラクダ1、ラクダ2、ラクダ3、ラクダ4、ラクダ5と個体識別し、それぞれのラクダがどの荷物を運んだかのリストを作成した（表2、表3、表4、表5、表6）。

ラクダの年齢は、ラクダ1からラクダ5まで順番に、8歳、8歳、6歳、5歳、5歳である（表7）。種オスは去勢オスより力が強いが、扱にくい場合があるという。フタコブラクダのオスは約5歳で成獣になり、10歳前後が駄獣としてはもっとも力がある。ラクダは最長で20歳くらいまで生きるといえるが、15歳を越えたラクダを人間が飼うことは稀である。

5頭のラクダの性・年齢と、6月13日に運んだ荷物の重さを表7にまとめた。

この日に5頭のラクダが運んだ荷物を「家の材料」と「家財道具」に分け、それぞれの品目のリストと重量を表8、表9にまとめた。住居（天幕）の重さは全部で727kgであった。この天幕は、N氏の長男夫婦のもので、「壁（ケレゲ кереге）5枚、屋根棒（オーク ұық）80本」というもっとも小型の部類にはいる。N氏自身の天幕は、さらに大型のものであるということだった。

家財道具は、天幕の中に入れて使う寝具、食器、絨毯などである。絨毯（トゥス・キーズ түс киіз）は、壁にかけて使い、防寒と同時に美しい装飾を楽しむものである。床敷カーペット（サルマック сырмақ）も、カザフ文様のアップリケが施されている（図4、図6参照）。6月13日に運んだ家財道具は全部で386kgであり、この日5頭のラクダは合わせて1113kgの住居と家財道具を運んだ。

3.5. 天幕の組み立て方

N氏たちは、夏営地に到着するとすぐに荷物をラクダから降ろし、休む間もなく天幕を組み立てにかかった。天幕の壁は、板を格子状に組み合わせたもので、たたむと棒状になる（図4参照）。この格子を広げると長さ5メートルまで伸びる。これを5枚合わせて丸い壁を作る（図5）。天幕の内部は、直径およそ6メートルの円になる。

天幕を組み立てる順序は以下のとおりである。

- ①扉（Эшк есік）の位置を決めて、扉を立てる（図5）。風が天幕の中に入り込まないように、風の向きと90度に入口を決める。
- ②木製の格子状の壁（ケレゲ кереге）を広げながら、丸い壁をつくる。

カザフ人の移牧にともなう伝統技術

表2 ラクダ1が運んだ荷物

品目	重さ (kg)	個数	合計 (kg)
扉	38	1	38
壁 (木製, 格子状)	24	2	48
フェルト (壁用)	30	1	30
フェルト (屋根用)	40	1	40
屋根部の飾り布	12	1	12
覆い布 (内側)	27	1	27
カーペット (床敷)	8	1	8
絨毯 (壁掛け)	7	1	7
枕	1	5	5
ミシン	20	1	20
食器類 (箱詰め)	20	1	20
煙突	5	2	10
合計			265

表3 ラクダ2が運んだ荷物

品目	重さ (kg)	個数	合計 (kg)
壁 (木製, 格子状)	24	2	48
天窗 (木製)	18	1	18
フェルト (壁用)	30	1	30
フェルト (屋根用)	40	1	40
フェルト (天窗用)	18	1	18
防砂壁 (葦製)	8	2	16
防水シート	32	1	32
布団	7	3	21
カーペット (床敷)	8	1	8
絨毯 (壁掛け)	7	1	7
食器棚	22	1	22
合計			260

表4 ラクダ3が運んだ荷物

品目	重さ (kg)	個数	合計 (kg)
フェルト (壁用)	30	1	30
フェルト (屋根用)	40	1	40
防砂壁 (葦製)	8	2	16
下端部の防砂壁(葦製)	5	2	10
覆い布 (外側)	35	1	35
布団	7	2	14
カーペット (床敷)	8	1	8
ストーブ	35	1	35
食料 (小麦粉など)	30	1	30
合計			218

表5 ラクダ4が運んだ荷物

品目	重さ (kg)	個数	合計 (kg)
壁 (木製, 格子状)	24	1	24
屋根の柱 (木製)	1	40	40
フェルト (屋根用)	40	1	40
ベッドの板枠	5	2	10
カーペット (床敷)	8	1	8
絨毯 (壁掛け)	7	1	7
ゆりかご	18	1	18
食料 (小麦粉など)	20	1	20
衣類(トランク2個)	20	1	20
合計			187

表6 ラクダ5が運んだ荷物

品目	重さ (kg)	個数	合計 (kg)
屋根の柱 (木製)	1	40	40
フェルト (壁用)	30	1	30
下端部の防砂壁(葦製)	5	2	10
ベッドの板枠(頭部)	22	1	22
マットレスと金網	30	1	30
椅子	8	1	8
絨毯 (壁掛け)	7	1	7
紐類	15	1	15
鍋, やかん一式	21	1	21
合計			183

表7 ラクダ5頭のまとめ

No.	性別	年齢	積載量 (kg)
1	種オス	8	265
2	去勢オス	8	260
3	去勢オス	6	218
4	去勢オス	5	187
5	去勢オス	5	183
合計			1113

表8 家の材料

品目	カザフ語	重さ(kg)	個数	合計(kg)
扉	есік	38	1	38
壁(木製, 格子状)	кереге	24	5	120
天窗(木製)	шаңырақ	18	1	18
屋根の柱(木製)	ұық	1	80	80
フェルト(壁用)	туырдық	30	4	120
フェルト(屋根用)	туырдық узік	40	4	160
フェルト(天窗用)	тундік	18	1	18
防砂壁(葦製)	ши	8	4	32
下端部の防砂壁(葦製)	ірге ши	5	4	20
屋根部の飾り布	басқур	12	1	12
覆い布(内側)	ішкі көшкі	27	1	27
覆い布(外側)	сыртқы көшкі	35	1	35
防水シート	жылтыр қағаз	32	1	32
紐類	арқан	15	1	15
合計				727

表9 家財道具

名称	カザフ語	重さ(kg)	個数	合計(kg)
ベッド	төсек	32	1	32
マットレスと金網	матрас көрпе жапқыш	30	1	30
食器だな	қазанаяқ	22	1	22
椅子	орындық	8	1	8
カーペット(床敷)	сырмақ	8	4	32
絨毯(壁掛け)	тұс киіз	7	4	28
布団	көрпе	7	5	35
枕	жастық	1	5	5
ゆりかご	бесік	18	1	18
食器類	ыдысаяқ	20	1	20
ミシン	ісмашина	20	1	20
食料(小麦粉など)	ұн	50	1	50
衣類	Киім	20	1	20
ストーブ	пеш	45	1	45
鍋	қазан	7	2	14
やかん	шәугім	1	1	1
水差し	қоман	1	1	1
乳攪拌用革袋	саба	5	1	5
合計				386



図5 住居を組み立てているところ

- ③ケレゲどうしを、専用の紐（ケレゲ・バオ керге бай）で縛って連結させる。
- ④天窗（シャヌラック шаңырақ）を支柱（бакан бақан）2本で支えて立てる。（баканは天幕が完成したあとではずす。）
- ⑤天窗から壁へ、幅の広い紐（ジェル・バオ жел бай「風の紐」の意）を渡して、天窗を固定する。
- ⑦屋根棒（オーク ұық）の一端を天窗の穴に入れ、他方を壁に固定して、傘の骨のように放射状になった屋根棒で屋根を形成する。屋根棒と壁を専用の紐（オーク・バオ ұық бай）で縛って屋根を固定する。
- ⑧幅広の帯状の紐（Ишкі-Арқан ішкі арқан）を壁に一周させて、壁全体を締め付けて固定する。
- ⑨防砂壁（チイ ши）を壁の外側に巻く。防砂壁は、葦で作られた「ござ」のような形状をしている。防砂壁を作るときに、葦に色糸を巻き付けて彩色（廣田，2016）したものを織り込んで作った「模様入りの防砂壁」をとくに、オラガン・チイ（ораған ши）という。
- ⑩屋根棒の外側に、帯状のものを巻いて屋根を締め付けて固定する。この帯状のものは、織物で作ったものはバスクル（басқур）といい、フェルトで作ったものはカラカス（қарақас）という。どちらにも模倣がついており、模様面を内側にして、天幕の中にいるときに模様が見えるようにする。
- ⑪壁用フェルト（Толдоқ туырдық）を外側から壁に巻き付ける。
- ⑫壁用フェルトの角2か所から出ている紐（Толдақ・Бай туырдық бай）を屋根を越えて向こう側の壁の格子上部に縛り付けて、壁用フェルトを固定する。
- ⑬屋根用フェルト（Толдоқ・Узік туырдық үзік「屋根のフェルト」の意）を屋根にか

ぶせる。

- ⑭フェルトの角に固定されている専用の紐（ウジク・バオ узик бай 「屋根の紐」の意）を屋根の反対側まで回し、壁に沿って地面まで紐を降ろし、壁の格子の足元に縛り付ける。こうして屋根用フェルトを固定する。
- ⑮内側の白布（イシキ・クシキ ішкі көшкі「内側の布」の意）を、天幕全体にかぶせる。
- ⑯専用の紐（イシキ・クシキ・バオ ішкі көшкі бай 「内側の布の紐」の意）で白布を壁（ケレゲ керере）に固定する。
- ⑰防水用にビニールシート（ジャルトゥル・カガズ жылытыр қағаз「ビニールの紙」の意）を屋根にかぶせる。
- ⑱白い外布（スルトゥク・クシキ сыртқы көшкі「外の布」の意）を天幕全体にかける。
- ⑲幅広の紐（スルトゥク・ベルデオ сыртқы белдеу「外の腰まわり」の意）と、太い紐（アルカン арқан）2本を天幕の周りにまわして縛る。
- ⑳外布から出ている紐（スルトゥク・クシキ・バオ сыртқы көшкі бай「外の布の紐」の意）をアルカンに縛り付けて外布を固定する。
- ㉑天窓を覆うフェルト（トゥンドゥク тундік「夜のもの」の意）を、天幕の頂上めがけて放り投げて、天窓に載せる。
- ㉒トゥンドゥクの4角から伸びる紐4本（トゥンドゥク・バオ тундік бай「天窓覆いのフェルトの紐」の意）を壁の格子に縛る。3本で固定し、後の1本は開閉に使う。トゥンドゥクは夜になると閉め、朝が来ると開ける。保温と明りとりを兼ねたものである。
- ㉓トゥンドゥクの中心にとりつけた帯状の紐（クンドゥク・バオ кіндік бай「へそ紐」の意）を天幕の内側から、壁の格子に縛って固定する。



図6 天幕の内部

⑭下端部用の砂防壁（イルゲ・チイ ірге ши）を、天幕の裾周りに巻き付ける。

⑮太くて頑丈な紐（バストゥルガン・アルカン бастырған арқан「ひっばっている太紐」の意）2本を扉の左右の地面に固定し、この太紐を正面から屋根を越えて家の裏側まで渡し、その端を岩に結びつける。こうして、天幕全体が風で吹き飛ぶのを防ぐ。

6月13日の場合では、建て始めて3時間半後（昼食の40分を含む）には快適な天幕が完成した。それから、絨毯を壁に掛け、寝具、衣類、食料、食器などを家の中に入れ、最後にストーブ（Пешня）を入れて湯を沸かし、夕方5時に皆でお茶を飲んだ（図6）。

4. 考察

4.1. 移牧の意味

モンゴル国バヤン・ウルギー県に住むカザフ人たちは、牧畜を生業として暮らしている人が多い。今日では、もちろん、公務員、医師、商店主、会社や商店の従業員、日雇い労働者として生計を立てている人もウルギー市を中心にいるが、そんな人たちでも、自宅で家畜を飼っていたり、郡部の親類に家畜を預けている人がほとんどである。

とくに近年は、カシミヤの値が上がったということでカシミヤ・ヤギを多数飼う人が増えている。牧畜は、現金収入を得る手段になるだけでなく、家畜さえ飼っていればその乳と肉を利用して、かなり自給的な生活を送ることができる。

カザフ人の食生活は、基本的には乳製品が中心であり、毎日、ウシ、ヤク、あるいはヤギの乳がたっぷり入った紅茶を、頻繁に、かつ大量に飲む。その他、バターと酸乳は毎回の食事と紅茶の時間に欠かせないし、非常に固くて日持ちする乾燥チーズは飴のようになめたり、ちょっとした空腹のときに口に入れる大切な食料である。また、11月12月にまとめて屠畜し、乾燥させたり冷凍させたりして保存している肉は、スープの出汁をとったり、小さく刻んで炒め物にいれたりして食べる。モンゴル国のカザフ人の食事は、購入した小麦粉あるいは米といった炭水化物と、前述した乳製品と肉のみであるといっても過言ではない。

モンゴル国のアルタイ山麓で牧畜を営むには、牧草の確保が重要な課題となる。バヤン・ウルギー県の標高は全体が高く、県内の95.3パーセントの土地が標高1600メートル以上であり、高度2000メートルを超えると、8月で初雪を迎える場所もある。限られた時期の限られた場所の牧草地を求めて家畜を連れて移動するのは、まず、家畜の餌を確保するためであり、人間側の避暑や快適さのための移動ではない。

4.2. ラクダによる運搬

ラクダが長距離移動する場合に、運搬できる荷物の重さは一般に300kg前後と言われている。（短時間なら600kgを載せることができるという。）今回のN氏のラクダは、おおよそ180kgから270kgの荷物を運んだ。標高差433メートルを一気に上るのだから、このくらいの荷重が妥当なのではない



図7 ヒトコブラクダの運搬用鞍（2008年アルジェリアにて）

だろうか。

今回の調査時に運んだ荷物（合計1113kg）は、すべてN氏の長男のものであった。しかし、N氏自身の天幕は、より大型のものであるという。また、N氏の家財道具には、重いものとしてベッド4個にタンス2個が含まれ、しかもタンスは古い時代のもので非常に重厚である。

一般に、小さな天幕（および家財道具）を運ぶにはラクダ5頭で足りるが、大きな天幕（および家財道具）を運ぶにはラクダ10頭が必要であるという。N氏の場合は、ラクダ5頭を何度も春営地と夏営地を往復させることで、自分の天幕や家財道具を運んでいた。

ラクダで荷物を運ぶに際し、荷物用の鞍を使う場合がある。例えば、アルジェリアのラクダ遊牧民トゥアレグは、ヒトコブラクダのコブの上（頂点の前方）に荷物用の鞍を置いて荷物を運んでいた（図7）。

一方、フタコブラクダの場合、コブとコブの間に人間が座ったり、あるいは荷物を縛るロープを通したりして、コブの間に加重がかかりがちである。このため、このコブの間の背骨を傷めやすいという。

歴史的にはシルクロードなどの長距離輸送にフタコブラクダを使ったときは、コブ全体を覆うような鞍を考案し、なるべく加重を分散させて荷物を運んだ（Sala, 2016）が、今日のモンゴル国カザフ人は、鞍を使わない。そのかわりに分厚いフェルトを巻いてコブを保護し、荷物を縛るロープはコブの間だけでなく、前のコブの前方、後ろのコブの後方にとおすようにしている。

ラクダは肉、乳を食用に利用できるだけでなく、糞も燃料として使える。さらに、ラクダは乾燥地だけでなく寒冷地にも耐えることができる。また、他の家畜よりも運搬力においてすぐれており、カザフ人の遊牧と移牧を歴史時代から現在まで長期に渡って支えてきたといえよう。

参考文献

- 稲村哲也 2014 『遊牧・移牧・定牧—モンゴル・チベット・ヒマラヤ・アンデスのフィールドから』ナカニシヤ出版.
- 今村薫 2016 「カザフスタンにおける2種の家畜ラクダとそのハイブリッド飼育について」, 今村薫編著『カザフ人の牧畜文化—ラクダ牧畜, 文様と装飾』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書15, 1-12頁
- 小長谷有紀 1996 『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社.
- 谷泰 2010 『牧夫の誕生—羊・山羊の家畜化の開始とその展開』岩波書店.
- 西村幹也 2011 「モンゴル国のカザフ人」『日本とモンゴル』46(1): 25-31.
- 廣田千恵子 2016 「モンゴル国カザフ人の装飾文化」, 今村薫編著『カザフ人の牧畜文化—ラクダ牧畜, 文様と装飾』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書15, 1-12頁
- Sala, Renato 2016 The history of camel domestication from literary sources and archaeological document, 今村薫編著『カザフ人の牧畜文化—ラクダ牧畜, 文様と装飾』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書15, 49-88頁.